

青野茂則氏 ^{だいわ}大和染工株式会社代表取締役社長

戦後の今治タオル工業の晒し場をつくってきた人物のひとりであり、特許の取得数や技術のクオリティの高さでは一頭地を抜く技術者である。現在、大和染工(株)の2代目として組織を束ねながら、若い世代に「青野流モノづくり」の哲学を伝授すべく人材育成に力を注ぐ。同時に、新しい技術開発へのチャレンジ精神は衰えを知らず、若い世代に良い刺激となっている。



青野茂則氏


あおの・しげのり ☆ 1947年2月、今治市波方町大浦生まれ。今治市立日吉小学校、今治市立日吉中学校をへて、愛媛県立今治西高等学校に学ぶ。1965年4月に亜細亜大学経済学部に進学し、同大学卒業後、1969年4月に父親が創業した大和染工(株)に入社。愛媛県繊維染色工業組合の技術委員長を20年間務め、エネルギーの効率化の実現にリーダーシップを発揮したのち、同組合8代目理事長に就任。1980年代を中心に多くの特許を取得し、染色業界の発展に大きな功績を残している。


1. 幼・少年時代

モノづくりのおもしろさは、小さい頃、おじいちゃんから学んだ

1947年2月22日、青野茂則氏は、今治市波方町大浦で父・茂信氏と母・房子氏との間に3人姉弟の末っ子として誕生した。父は、真面目で温厚な性格であり、青野氏がやんちゃをしても一度も手をかけることはなかった。母は、明るく社交的な性格でオルガン弾きの名人だった。幼少の頃は、母の弾くオルガンの音に合わせて、家族や友だちといつも一緒に歌っていた。

青野氏は、温和な父親と太陽のように明るい母親のもとで伸び伸び育った。伸び伸びしすぎて近所でも評判のガキ大将に成長した青野氏は、いたずらが過ぎて何かといつも両親に謝っていた記憶しかない。そのため、「小さいときに、良い思い出というのはないんですよ」と漏らす青野氏であるが、ものごころがついた頃からモノをいじるのは大好きだった。

モノづくりの楽しさは、母方の祖父の幸四郎氏から教えてもらった。幸四郎氏は、大正時代に塩田ポンプ  の技術で特許を取得するほどモノづくり名人であった。青野氏は、そんなおじいちゃんの側にいて何でも手づくりする様子を見て、モノづくりの習慣が自然と身に付いていった。

青野氏は、高校を卒業するまでは地元で過ごし、今治市立日吉小学校、今治市立日吉中学校、愛媛県立今治西高等学校でそれぞれ学んだ。そして、1965年4月に亜細亜大学  経済学部に進学し地元を離れて上京した。東京を選んだ理由は「先輩や友だちがおったもんで」と青野氏は言うが、大学進学をきっかけに今治を外からみる機会を得て、今治の良さを改めて知った。そして、同大学を卒業後、1969年4月に父親が創業した大和染工(株)に入社することになる。

2. 大和染工(株)入社

大学卒業後すぐに今治に帰ってきたのは父の茂信氏が病に倒れたためであり、長男の青野氏は父の後を継ぐつもりで帰郷した。

大和染工(株)は、1956年に設立されたタオルの染晒加工をおこなう会社である（染晒加工についての詳細は「タオルびと」2016年12月号～2017年3月号を参照）。今治タオルの生産高が日本一となった1960年以降、高度成長期の好況も追い風となって事業は順調に大きくなっていった。そして1972年、青野氏の入社後まもなくして本社を現在の^{きぬほし}衣干町に移転し、時代のニーズに合わせてチーズ染色を開始した。

1980年代になると第二、第三工場を新設し、それぞれに新しい機械も導入し、今治タオルの生産量の増加にともなって規模の拡大を図った。表1の「大和染工(株)沿革史」でみるように、第二工場では1981年のビームサイジング（ビームの経糸をまとめて糊付する）の開始、1987年のスラッシャーサイジングマシン（整経済みの経糸をまとめて糊付する大型の機械）の導入、1988年のワーパー（整経機）の増設があり、第三工場では1986年にテントー（生地幅を整える幅出しの機械）が導入された。染色加工に必要な機械はいずれも大型で相当の資金を必要としたが、1980年代における一連の設備投資によって生産性を上げていった。

会社としての転機は、1990年代に訪れた。1990年、今治タオルの売上高が戦後はじめて下降に転じ、タオル不況に陥るなかで染色業界も打撃を受けた。タオル不況のおもな原因は、中国製タオルの流入だった。中国製タオルの強みは、安価な人件費に支えられた商品の安さにある。平均して繊維製品における売上高人件費率は15%～20%であり、タオルづくりにおいても人件費の安さは競争優位に直結する。当然、中国は染色加工の段階でかなりのコスト優位を発揮しており、青野氏は「このままではいけない」と危機感を募らせた。そして、会社の将来を考えてある大きな決断を下した。中国への進出である。

表1 大和染工株式会社沿革史

年	内容
1956	大和染工株式会社設立
1972	会社を現在の今治市衣干町に移転し、チーズ染色開始
1981	第二工場（今治市東鳥生町）を新設し、ビームサイジング開始
1986	第三工場（今治市衣干町）を新設し、本社より生地加工設備を移転 第三工場に tenter 導入
1987	第二工場にスラッシャーサイジングマシン導入
1988	第二工場にワーパー増設
1989	本社にチーズ無人化プラントが完成し、チーズ染色設備一新
1990	第二工場にスラッシャーサイジングマシン増設
1993	中国南通太和漂染有限公司設立 第三工場に連続タンブラー乾燥機導入
1994	中国南通青野服飾有限公司設立
1996	第三工場にエアージェットフローを導入し、布帛の加工開始
1998	第三工場に連続染色機を導入し、不織布の染色を開始
2000	第三工場にニット用 tenter を導入し、ニット加工を開始
2001	第三工場にジッカー導入 ISO90001 認証取得



本 社 工 場 正 面

出典： 大和染工（株）ホームページ「会社沿革」より。

図 1 中国と江蘇省



出典： 江蘇省観光局。

* 黄色の部分 が 江蘇省。

図 2 江蘇省と南通市



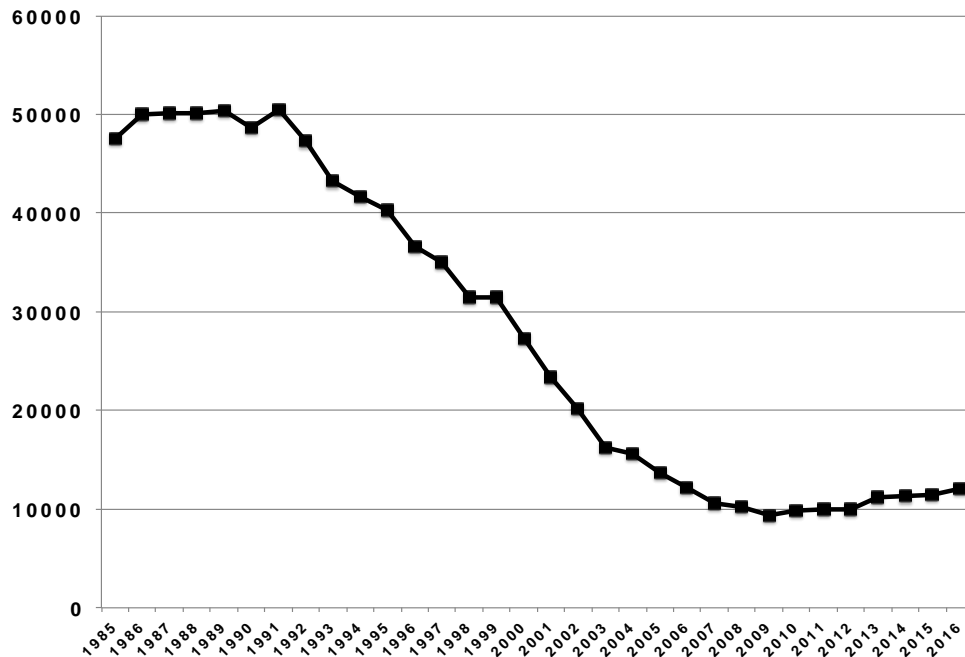
出典： 「旅のとも、ZenTech」

* 赤丸は筆者が記入。

1993年、中国の江蘇省南通市（図1、2）に南通太和漂染有限公司を設立し、中国で染色加工を開始した。翌年の1994年には、南通青野服飾有限公司を設立し、縫製工場もスタートさせた。生産拠点の中国への拡大は先ほど述べた要因が引金となったが、その他にも青野流モノづくりの伝播という使命も背負っていた。実のところ、以前より中国から技術指導の要請を受けており、青野氏はしばしば訪中していた。自ら築き上げてきた技術を惜しみなく伝授する姿勢は国境を越え、いまもこれらの工場は稼働している。

タオル業界をとり巻く1990年代以降の変容は、染色加工業界にも深刻な影響をもたらしたが、大和染工では表1でみるように1998年の不織布染色の開始、2000年のニット加工の着手など加工範囲が広げられ、タオル生産が縮小しはじめても設備投資はつづけられた。また、より効率を上げるためにエネルギー消費をなるべく抑制した技術の開発も怠ることはなかった。

図3 今治タオル生産量（トン）



出典： 「企業数、織機台数、革新織機台数、従業員数、綿糸引渡数量、生産量、売値、生産額、輸出・輸入数量の推移」（「今治タオル工業組合」HP）より作成。

JAPAN ブランド育成支援事業のもとで2006年から着手された「今治タオルブランド」構築の試みに成果が現れ、図3のように、1990年から低下していた生産量は2009年を底にそれ以降少しずつ微増に転じた。染色加工業界も活況を取戻しつつあるが、業界の抱える人手不足からさらなる生産性の向上とエネルギー効率の改善が求められている。大和染工では、後述するように、青野氏の開発による技術を用いてこれらの問題に積極的に取り組んでいる。



工場に設置されている青野式糊抜き精練機

大和染工の工場に現在設置されているおもな機械については、乾燥機がイタリア製、染色機が日本製であるが、糊抜き精練機は青野氏自身が開発にあたったエネルギー効率の高い青野式である。いまでも現役で動いている青野式糊抜き精練機は、青野氏による設計図をもとに今治市内にある鉄工所が製作したものである。中国の工場にも青野式が稼働している。（次号につづく）

